

横浜現代史人物伝③

又木 誠八郎



又木誠八郎

又木誠八郎は、一九二四(大正十三)年三月二十五日、鹿児島県に生まれた。

地元の志布志中学校(現在の志布志高等学校)を卒業後、日本体育専門学校(現在の日本体育大学)に学んだ。その後、一九四三(昭和十八)年三月神奈川県立横浜第二中学校(現在の横浜翠嵐高校)を振り出しに、新城高校、

横浜平沼高校、高浜高校(平塚市)、海老名高校などで、四〇年以上にわたって教鞭をとった。その傍ら横浜バレー

ボーラー協会、神奈川県バレー・ボーラー協会をはじめ、各種団体の役員をつとめるなど、戦後のバレー・ボーラーの普及と技術向上に力を尽くした人物である。

横浜バレー・ボーラー協会の創立

横浜・神奈川における戦後のバレー・ボーラーは、一九四六(昭和二十一)年四月平楽国民学校で開かれたYMCア主

この大会を受けて、翌年(一九四八年)四月横浜バレー・ボーラー協会が結成された。

当時、横浜市体育係長であった青木近衛。彼は東京五輪の際にバレー・ボーラー第二会場の誘致運動を主導する人物である。又木は当初協会の代表理事をつ

催の大会に始まる。未だ空襲の爪痕が残り、市街地の中枢を接收されているなかで、三四チームが参加した。又木は、旧知の仲間との再会に感激する一方、「学校の白っぽい汚れた感じの壁」が強く印象に残ったという。この大会と前後して神奈川県バレー・ボーラー協会が再発足し、又木は常任理事となつた。

(現在の日本体育大学)に学んだ。その後、一九四三(昭和十八)年三月神奈川県立横浜第二中学校(現在の横浜翠嵐高校)を振り出しに、新城高校、横浜市民バレー・ボーラー大会が横浜二中で開催され、約五〇チームの参加を得た。当時、同校で体育教師をつとめていた又木も準備に勤しんだ。

横浜二中(現翠嵐高)の校庭に生徒の手によつて薄暮の中で、しつらえた砂利だらけのコート?四面、

四寸角材のポール:勿論フエンス等あろう筈はなく、レシーブに失敗すればボーラーは校庭を転々、下手すると崖下に落ちる。必死にボーラーを追う。空き腹にズシリと来る。まことに鍛練的ハードなもので、ヨーチンと称する擦り傷用の薬を必需品とした。今顧みれば素朴そのもの賑やかな楽しい大会であった(『横浜バレー・ボーラー協会五年史』三六頁)。

この大会を受けて、翌年(一九四八年)四月横浜バレー・ボーラー協会が結成された。こうした流れを主導したのは、

又木誠八郎。彼は後年、次のように当時を振り返つてゐる。

バレー・ボーラーがオリンピックの正式種目に採用されたのは東京大会からである。そのため参考になる文献がない。文字通り無から有を生むことばかり一衆知を集めての企画で、本務の傍らそれに専念するために帰宅が深夜におよぶこと

催の大会に始まる。未だ空襲の爪痕が残り、市街地の中枢を接收されているなかで、三四チームが参加した。又木は、旧知の仲間との再会に感激する一方、「学校の白っぽい汚れた感じの壁」が強く印象に残ったという。この大会と前後して神奈川県バレー・ボーラー協会が再発足し、又木は常任理事となつた。

(現在の日本体育大学)に学んだ。その後、一九四三(昭和十八)年三月神奈川県立横浜第二中学校(現在の横浜翠嵐高校)を振り出しに、新城高校、横浜市民バレー・ボーラー大会が横浜二中で開催され、約五〇チームの参加を得た。当時、同校で体育教師をつとめていた又木も準備に勤しんだ。

横浜二中(現翠嵐高)の校庭に生徒の手によつて薄暮の中で、しつらえた砂利だらけのコート?四面、

四寸角材のポール:勿論フエンス等あろう筈はなく、レシーブに失敗すればボーラーは校庭を転々、下手すると崖下に落ちる。必死にボーラーを追う。空き腹にズシリと来る。まことに鍛練的ハードなもので、ヨーチンと称する擦り傷用の薬を必需品とした。今顧みれば素朴そのもの賑やかな楽しい大会であった(『横浜バレー・ボーラー協会五年史』三六頁)。

この大会を受けて、翌年(一九四八年)四月横浜バレー・ボーラー協会が結成された。こうした流れを主導したのは、

又木誠八郎。彼は後年、次のように当時を振り返つてゐる。

バレー・ボーラーがオリンピックの正式種目に採用されたのは東京大会からである。そのため参考になる文献がない。文字通り無から有を生むことばかり一衆知を集めての企画で、本務の傍らそれに専念するために帰宅が深夜におよぶこと

が屡々で、当時はまだそれが至極当然という風潮がみなぎつていた。

みんな世紀のオリンピック大会開催とばかり、失敗は到底許される筈ないので気迫十分な緊張の毎日であつた。東京オリンピック開催は私にとつて創造性を高め、企画力を磨き組織的運営に自信を与えてくれた尊い体験であつた。

(『神奈川県バレー・ボーラー協会五年史』八一頁~八二頁)

が屡々で、当時はまだそれが至極当然という風潮がみなぎつていた。

みんな世紀のオリンピック大会開催とばかり、失敗は到底許される筈ないので気迫十分な緊張の毎日であつた。東京オリンピック開催は私にとつて創造性を高め、企画力を磨き組織的運営に自信を与えてくれた尊い体験であつた。



東京オリンピックの際の横浜文化体育館の施設担当職員 前列右から6人目が又木。

東京オリンピックのバレー競技は、男女合計二二試合が行われ、三三〇

——オランダ戦は三位決定戦で、日本男子が銅メダルを獲得した。また同じ女子もソ連に勝つて金メダルを獲得（駒沢体育館）、以後バレー・ボール人気は全国に広まっていった。

神奈川県バレー・ボール協会

又木誠八郎は「一九六六(昭和四一)年四月神奈川県バレーボール協会の理事長に就任した。県協会は、横浜・川崎・横須賀・藤沢・小田原・県央・平塚の七つの地区協会(一九七七年から相模原が加わる)と、実業団・高体連・中体連・大学などの友好団体とを束ねていた。実業団では日本鋼管・高体連では藤沢高校が全国大会で優勝を重ねるなど、極めて高い水準を誇っていた。又木は、「理論的な根拠に立脚した、すじを通す強い性格と、繊細な感覚とをもち、その実行力」(『神奈川県バレーボール協会五十年史』二四頁)をもつて、水を得た魚の如く、組織の拡充に邁進することとなる。

（最初の仕事は日本アーティスツ・現在の
Vリーグ）の開催であった。日本バレ
ーボール協会では、レベルの向上と底
辺の拡大を狙つて、一九六七年に日本バ
リーグを発足させた。神奈川県からは
日本鋼管と富士フィルムが選ばれ、横
浜文化体育館・川崎市体育館・平塚見
附台体育館の三ヶ所で開催されること
となつた。

リーグ開催の実行委員長として、県下の地区協会と協力しながら準備を進めた。最大の問題は観客動員数と会場設備の問題であった。深夜に車に分乗してひそかに電柱にポスターを貼つたりトラックを自前で借りてきて二千人以上上の椅子を運び込んだり、苦労が絶えなかつたようである。又木は、穴を空けたベニヤ板にポスターを貼つて針金で結びつける方法を指南するなど、役員たちを鼓舞しながら、大会を成功へと導いた。この経験が、地区協会の運営能力を磨き、県協会の組織強化にもつながる結果となつた。

友好団体と家庭婦人バレー・ボール連盟

又木誠八郎は、横浜第二高等学校（翠嵐高校）を率いて国体で準優勝した経験（一九四九年）を持ち、神奈川県のみならず、関東・全国の高体連の専門部長をつとめるなど、高校バレーの技術指導・強化に終始つとめた。しかしそれ以上に、彼が心を碎いていたのはバレーボール人口の拡大であつた。

つて組織強化と普及拡大を図ることが
彼の理想とする組織像であった。

そこで新たに、家庭婦人バレーボー
ル連盟（後述）、クラブバレー・ボール連
盟（一九七五年）、小学生バレー・ボール
連盟（同年）を発足させた。これらの
友好団体は、一九六六（昭和四二）年
から毎年開催されていた県選抜優勝大
会に参加し、各種別の選考競技会で技
術を競い、交流を深めることとなつた。
また一九七三年にはバレー・ボール神奈
川友の会を誕生させ、バレー・ボール愛
好者の組織化・定着化を図ろうとした。
なかでも最も力を入れたのが、家庭
婦人バレー・ボール連盟の組織である。
東京オリンピック以後、各自治体では
婦人の健康促進と相互交流を目的とし
て「ママさんバレー」を奨励しており
一九七〇年時点で県下に二千を超える
チームがあると言われていた。これら
の団体を組織化すべく、一九六九年一
月に結成されたのが神奈川県家庭婦
人バレー・ボール連盟である。

同連盟は、春と秋に競技会を開催す
るなど、活動を続けたが、加盟団体は
目標の二百チームに届かず、組織化は
進まなかつた。同連盟の顧問であつた
又木は、地区連盟を創設することを勧
めたが、思うように進展しなかつた。
そうしたなか、一つの転機となつた
のが一九七六年の「山ゆり杯」である。
このイベントは、神奈川新聞社・テレ
ビ神奈川と県協会が主催した競技会で
婦人バレー・ボールを初めてマスコミが

国際親善と環太平洋ジユニア選手権

東京オリンピック以後、各自治体では婦人の健康促進と相互交流を目的として「ママさんバー」を奨励しており一九七〇年時点で県下に二千を超えるチームがあると言われていた。これら の団体を組織化すべく、一九六九年二月に結成されたのが神奈川県家庭婦人バレーボール連盟である。

大きく取り上げるということで注目が集まつた。二七七チームが参加し、県内八ブロックに分れて三ヶ月にわたる予選会が行われた後、各地区代表によるトーナメント方式で優勝杯を争つた。

この翌年、県家庭婦人バレーボール連盟は改組し、県下に九地区連盟が置かれることとなり、又木は副会長の座に座つた。第二回目の山ゆり杯からは、家庭婦人バレーボール連盟も共催に加わり、以後九ブロックで予選が実施されるようになつた。また第九回（一九八四年）からは小田急も加わり、参加チームも急増の一途をたどつた。

全般を取り仕切った。このほか、中国上海市との婦人バレー・ボール交歓会（一九七五年六月）や、高校選抜チームの友好代表団派遣（一九七六年八月）なども行われた。



上海市との婦人バレーボール交歓会（広報課写真資料）

ビーチバレーの興隆

又木誠八郎の最後の活躍の舞台は、ビーチバレーであった。彼は、かねてよりバレーボールのインナー化に強い疑問を抱いていた。

東京オリンピックを境にそれ以降の日本リーグ等は全て屋内で行つ

たと思う。私は一般の大会の屋内には不賛成だつた。なぜなら、オープンコートの方が健康的だといふことと、皆が屋内に入り始めたころ藤沢高校はオープンコートで練習していて国体で優勝したといふ根拠があつたからだ（『横浜バーレーボール協会五十年史』一五〇

オーピンコートの方が身体の順応性と機敏性が鍛えられ、選手や役員の交流促進にも繋がる、と又木は確信した。

おりしも一九八七（昭和六二）年ヂーチバレーの世界選手権第一回大会がブラジルのリオデジャネイロのイパネマ海岸で行われた。日本を含む七ヶ国三四チームが参加し、好評を博した。以後その親しみやすさ、面白さから、

世界選手権が開催された年の八月

側担当者として運営に携わり、高校生をはじめとする若い世代に対して、世界の実力を体感し、国際感覚を育む場を提供し続けた。横浜では、一九八二年八月に第九回大会が開催され、又木

藤沢市の湘南江の島海岸で第一回ビーチバレー・ジャパンが開かれた。三日間で二万七千人を集め、ファン投票によるペアの川合・熊田組が優勝した。又木は実行委員会委員長をつとめた。

ンバイ)・バンクーバー・上海・マニラに加えて、オーストラリア・ブラジルから選手を招いて、YOKOHAMA A ビーチバレー90が開催された。

付記

横浜市史資料室では、現在、又木誠八郎の関係資料を整理中です。なお末尾になりましたが、貴重な資料をご寄贈頂きました又木トシ様、またご仲介頂きました藤沢市文書館館長の中島淳一様、同館史料専門員の澤内一晃様に、心からお礼申し上げます。

参考文献『日本バレーボール協会五十年史』（日本バレーボール協会、一九八二年）／『神奈川県バレーボール協会五十年史』（神奈川県バレーボール協会、一九八四年）／『横浜バレーボール協会五十年史』（横浜バレーボール協会、一九九九年）／『オリンピック東京大会 バレーボール競技報告書』（日本バレーボール協会、一九六六年）／『白い軌跡』（神奈川県家庭婦人バレーボール連盟、一九九六年）／又木誠八郎『砂浜のレクリエーション』（ビーチバレー・ジャパン）を顧みて』（河川）六三一一〇、一九八八年）